

「physical fitness 体力」再考

—子どもにとって必要な身体とは—

石垣 健二

The critical essay on physical fitness:
a reconsideration of child's play and body

Kenji ISHIGAKI

1. 序 —「体力」に対する違和感—

「体育やその他身体運動は、体力向上のために実施される」。このことは、体育学という研究領域にこだわらずとも、ごく一般的な見解としてひろく認められていることだと思われる。しかしながら著者自身は、体力つまりphysical fitnessという言葉自体に、若干の違和感をもっている。というのは、現在我が国では、毎年おこなわれる体力テスト（体力・運動能力調査）の結果によって国民の体力が評価され、そして次のように叫ばれる。「最近の子どもたちの体力低下は深刻である」「関係省庁と連携し教育現場は体力を向上させるよう努力しなくてはならない」というようにである。しかしながら、昨今の我が国の社会状況を鑑みたとき、本当の意味において子どもたちに必要なphysical fitness身体能力というのは、一般的に理解されるような当該体力テスト（たとえば「反復横とび」や「50m走」）によって果たして評価されるのだろうか。昨今の子どもたちに必要な身体能力とは、むしろ当該テストによっては評価されえない部分にこそあるのではないかという疑問があるのである。逆にいうならば、現体力テストでおこなわれる「反復横とび」や「50m走」等の測定結果が高ければ、いまの子どもたちの身体は良好といえるのか。子どもた

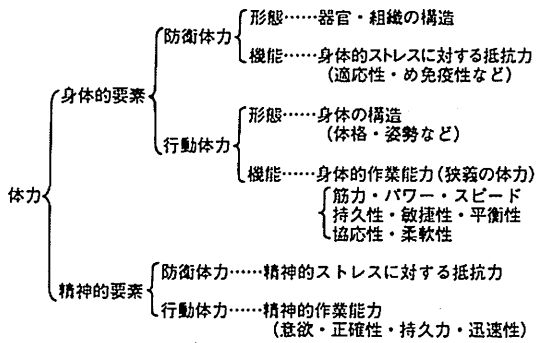
ちに本当に必要とされるphysical fitness身体能力とは、もう少し異なったレベルにおいて論じられるべきではないのか。そう感じるわけである。

よって本稿では、反復横とびや50m走によって測定される「敏捷性」や「スピード」といった現在使用されている体力の諸機能でないところの子どもにとって必要だと感じる身体能力、それを荒削りであるが素描できないかと考えるのである。

そのために以下のような手順で考察をすすみたい。1. これまでの体力論を概観し、上で論じた「体力」に関する問題点をより明確にした。2. 著者自身が担当する授業の学生レポートを紹介することで、先の体力と異なったところの子どもに必要な身体能力を示唆してみたい。3. 昨今の子どもたちの遊びを考察することによって、子どもたちの身体の変化を再認識し、そのうえで運動遊びの本質にせまりたい。4. 体育学において注目される身体論を紹介することで、今後子どもたちに必要とされる身体能力について展望してみたい。

2. 「体力」を概観する —何が問題か—

「体力」の辞書的な定義は、おしなべて、それを「人間の生活活動の基礎となる身体的能



〔図1 体力の概念図(猪飼による)〕²

力」¹と説明している。そして多くの場合、ここでは図1のような体力の概念図が提示され、①広義の体力は「身体的要素」と「精神的要素」から成り、そのそれぞれが「行動体力」と「防衛体力」をもつこと。また②狭義の体力は身体的要素だけから成り、③さらなる狭義の体力は、身体的要素の行動体力の部分、そして④最も狭義の体力は、当該行動体力の機能面に限られるということが説明される。

①に関連して言うならば、体力が身体能力であるにもかかわらず、そこに精神的要素までも含めることは、甚だ矛盾するようにも思われる。実際、physical fitnessという概念が、人間活動全体を把握するための他の概念 (total fitness, mental fitness, social fitness) と並列して考察される立場³もあり、それを考慮するならば、体力の概念から精神的要素を排除する方がより妥当性が確保されることになるだろう。しかし、身心の相関を常に重視しようとした体育学においては、身体を超えた問題までも射程にいれる必要があった⁴のである。

著者自身が問題を感じるのは、むしろ②③から最終的に④へと向かうところの狭義に解釈された体力についてである。体力を行動体力と防衛体力に大きく区別することは、体育学においてはまったく常識化されている事柄である。通常、行動体力は積極的に身体を動かす場合に必要となる行動力として、そして、防衛体力は外部から加えられる刺激やストレスに対する抵抗力として捉えられる。この両者は、それぞれに形態と機能に区別され、行動体力の「形態」としては体格、体型、姿勢などがあげられ、その「機

能」として筋力・パワー・スピード・持久性・敏捷性・平衡性・協応性・柔軟性などがあげられる。また防衛体力の「形態」としては身体の諸器官組織の構造があげられ、その「機能」として適応性、体温調節、免疫性などがあげられることになる。

以上のような体力の説明において、世間一般に最も馴染み深い「体力」のイメージはどれかと問うならば、おそらく間違いなく、それは最も狭義な体力、つまり行動体力の機能面である筋力・スピード・パワー・敏捷性・持久性・敏捷性・平衡性・協応性・柔軟性といった体力のイメージだということになるだろう。なぜなら、われわれの多くが、毎年「体力テスト」という名のもとで、実際に「握力」「垂直とび」「立位体前屈」「50m走」「持久走」「ハンドボール投げ」などを経験してきた⁵からである。そしてさらにその結果によって、体力章1級や2級、または「それらとはまったく縁がなかった」というふうにして、われわれは自らの体力に対して「優れている・ふつう・劣っている」という自己評価をあたえてきたからである。

しかし、体力に対する世間一般のイメージがそうであるということは、とりたてて問題とする事柄ではないかもしれない。むしろ問題は、世間一般を超えたところで、我が国全体がこの種のイメージに右往左往させられ、そして最終的にそのイメージに帰着してしまうということにある。というのは、平成14年9月には、中央教育審議会より「子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申)」⁶が提出されている。これは同内容の諮問に対する答申であるわけだが、その諮問の背景にこそ、この体力テストがあるのである。現体力テストは、部分的に修正されているものの昭和39年から継続しておこなわれており、その統計資料によれば、子どもたちの体力は昭和60年以降15年にわたり低下傾向を続けている。このことがまさに諮問を作成させる原因のひとつとなるわけである。

著者は、このような意味でいうところの体力の低下傾向を問題視しないわけではない。それはそれで国や自治体がそれ相応の政策をたて対応してゆくべき問題だと捉えている。しかしながら、当答申を一読し著者が疑問に感じるのは、

その内容が体力テストに終始してしまっていることにある。答申では、子どもたちに求められる目標として次の2点をあげている。ひとつは「運動をするための体力」であり、体力・運動能力調査（体力テスト）の平均値を上昇傾向にし、当面これまでの最高値を超えることを目標としている。もうひとつは「健康に生活するための体力」であり、高血圧者の割合など生活習慣病につながる要因に関する値や生活習慣病にかかっている者の割合を下げることをしている。後者が、先の防衛体力的な要素を加味しているということは明らかだろう。その意図は理解しやすい。しかし前者は、運動をするために必要な身体的能力は、結局のところ体力テストの結果がすべてであることを露呈してしまっているとも捉えられる。つまり体育やその他身体運動によって得られるところの身体的能力は、体力テストによってしか評価する術をもたないのである。もちろんこの目標が掲げられたあと、子どもたちを運動へと導くために様々な具体的方策があげられている。それを否定するつもりはない。しかしこれでは、子どもや世間一般の多くは、次のような安易な発想をするしかないだろう。「自分の体力テストの結果は人並み以上だった。だから安心」「人並み以下。もっと身体を鍛えなきゃ」というようにである。そして次に結果がでたときには「安心して運動を怠っていたので、体力が落ちた」「普段から運動を心がけていたので、体力が向上した」というような具合に、自らの身体能力に対する安易な因果論のサイクルを繰り返すことになる。このままでは、たとえ結果として、ここ数年のうちに子どもたちの体力テストの数値が上昇したとしても、手放しで喜ぶべきでないような、体力テストとは別次元で考えるべき身体の問題がとり残されることになる。そのように著者は危惧するのである。

そのような現在の「体力」というイメージとは異なった身体的能力、それは著者自身が日々体育教師として授業をするなかで、素直な感想として「この学生は、体力テストはまったくダメだが、抜群の身体能力をもっている」、また逆に「体力テストの成績は非常によいが、この学生は運動をまるでわかっていない」などと感

じるまさにその部分にこそ隠されているように思われる。このような意味でいうところのphysical fitness身体的能力を何とか素描できないかと以下より考察をすすめた。

3. 学生のレポートから考えさせられること

体力テストで評価しえないところの「子どもにとって必要な身体的能力」、それを考える最初のきっかけとして、著者自身が担当する授業「子どもの身体と健康」について紹介してみたい。まず、当該授業であつかう「ある事例」に対する学生の批評レポートを部分的に提示することにする。

【レポート1】

…(中略)…私は、園児にとって安全な環境を作ることが保育者の役目だと思っていました。でも、この「安全の配慮」の事例を考えたとき、保育者があまりに安全を強調し過ぎると、逆に、子供たちの危険察知能力や危険回避能力が育たないのではないか、それから、色んな状況に対する体の処し方も身につけられないのではないかと思うようになりました。園児の安全のために木の根っこを切ってしまうと、確かに怪我はなくなりますが、それでは何か子供が無菌室で育てられているような気がしてしまいます (下線部引用者)。

【レポート2】

私は根っこを切ってしまうのは反対だ。なぜかという危険が色々ある方が自然の気がするからです。…(中略)…私は幼児にどんどん危険なことをさせてあげたい(本当に死ぬかもしれない危険なことはさせないけど)。なぜかという、危険なことは楽しいからだ。私は小さいとき危険なことをいっぱいしたと思う。ブランコはできるだけ危険な乗り方をしていたと思うし、ブロック塀から落ちて大ケガをしたこともあった。でもそのおかげで、私は体が丈夫になった (下線部引用者)。

【レポート3】

私はやっぱり根っこは切るべきだと思う。○○さんが言っていることもわかるけれど、別に危険なことをしたり、ケガをすることがいいことだとは思わない。安全に遊ぶ中で、幼児が体を十分に使えばいいと思う。(下線部引用者)

このレポートの題材となっている事例について簡単に説明するならば、事例の幼稚園には立派な大木があり、その大木の太い根っこがアー

チ状にジャングルジムのそばにつきでている。a教員は、根っこに足をひっかけ怪我した子どもをみて、その根っこを切ろうと考えるが、「根っこ切っちゃうと、木が死んじゃうよ」という子どもたちの声によって、根っこ存続の道を選ぶことになる。また、b教員は、同様に足をひっかけ今度はジャングルジムに頭をぶつけてしまった子どもに接し、これまでも同じ場所で怪我した子どもがいたことを思いだし、自分の落ち度を深く反省し即刻園長にその根っこを切ってほしいと嘆願にゆくことになる。

著者自身は、この授業において、a・bどちらの教員が正しいかを問うつもりはないし、またそれを学生に判断しろというつもりもない。重視したいのは、学生が自分自身で適当と思われるスタンスを考え批評すること、そしてその批評に対して他人にコメントをもらい、もう一度じっくり考えてみることにある。つまり、自分の価値観の正当性を他人に表現しながら、その他人の価値観をも理解し、それら価値観を相対化したうえで最終的に自分のスタンスを考えてみるということである。

レポート1の学生自身が考えたことは「大人の過度な安全指導が、逆に子どもを危険にさらしてしまう」というまさにパラドックスだといえるだろう。つまり周りの大人や保育者などいわず管理者が安全を強調するあまり、逆に、当学生がいうところの危険察知能力や危険回避能力が育たないという自己矛盾的な状況をかかえるということである。学生自身が、それを無菌室という言葉で語っているのは非常に印象的だといえる。また、「危険なことをどんどんさせたい」「危険なことは楽しい」というレポート2も興味深い。この学生は、子どものとき危険な遊びをすることで自分の身体が丈夫になったと自己評価しているが、この学生がいう「丈夫」という表現は、いわゆる頑強だということだけではない意味が含まれているように思われる。それは何だろうか。レポート3は、レポート2に対するコメントである。ここでは、「あえて子どもたちに危険なことをさせなくても、子どもが身体を十分に使うことが大事なのではないか」という視点を提出してくれている。では、危険であるないにかかわらず「十分に身体を使

う」ことで育つ身体的能力とは、いったい何だろうか興味深いところである。

これら3つのレポートにおいて学生が主張しようとしていた子どもに必要な身体的能力を抽出するとしたならば、それぞれ以下になるであろう。レポート1からは「危険察知能力」「危険回避能力」「様々な状況に対する体の処仕方」、レポート2からは「危険なことをすることによって得られる丈夫な身体（ただし、丈夫とは頑強という意味だけでない意味が含まれている）」。レポート3からは、「十分に身体を使うことによって得られるところの身体的能力」。先に著者は、学生がそれぞれ価値観の相違を認識し、それらを相対化させることが授業で重視されると論じたが、これら学生が表現しようとした身体的能力は、それぞれ表面的に異なっているようで、しかしどこかで共通している部分があるように感じられるのである。これらの主張に共通した身体的能力とは、一体何だろうか。危険そうな遊びで「ある・ない」にかかわらず、学生たちが運動遊びのなかで獲得してもらいたいと願っている身体的能力とは何なのだろうか。子どもの遊びについて考察することで、それが探れないだろうか。

4. 「子どもの遊び」についての考察

4-1. 実感としての身体感覚

ずいぶん前の著作になるが、社会学者の桜井哲夫は「ことばを失った若者たち」において、現代青少年の「肉体に対する実感のなさ」ということを主張している。

このような自分の身体＝肉体に対する実感のなさは、ナイフで手を切ってみたら血が出るのだろうか、と考えてナイフで実際に手を切ってしまう小学生の存在や、公園に寝とまりする老人の失業者たちを襲う小・中学生の存在とも密接に結びついている。つまり、そこには痛みというの実感が失われてしまっているのである⁷。

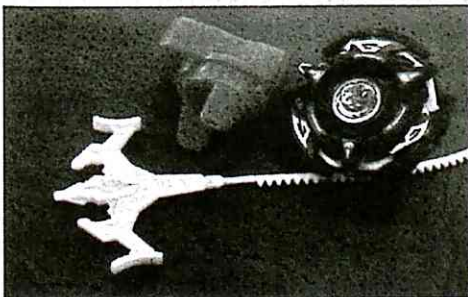
また、最近マスメディアで話題にされる教育学者齊藤孝も、その著「子どもたちはなぜキレるのか」において、「ためる」「こらえる」などの実際的な身体感覚の衰退にともなって、キレやすい子どもたちが発生してきたとして、次の

ようにいっている。

自分の身のうちに「ためて、こらえる」こと一般が、身につけられるべき技として自覚されなくなってきた。「堪忍袋の緒が切れる」という言葉には、一種の社会的な教育力があつた。この言葉が使われなくなったことによって、怒りの感情を抑制するイメージ技法を新しい世代はひとつ失ったことになる⁸。

もろもろの肉体的な実感・身体感覚が、本当に子どもたちの「キレ」と直接的に関係するかどうか⁹は別として、確かに、最近の子どもたちには、自身の身体を実感できるような経験が減少してきたのかもしれない。周知のことだが、昨年度より新学習指導要領にもとづき、小中高高等学校の体育において新しく「体ほぐし運動」が導入されている。ここで強調されるのも、やはり自分自身の「からだ気づき」ということであり、さかんに「自分の身体に意識を向けてみよう」ということが叫ばれる。このように身体感覚が希薄化するその原因は、現代のいかなる状況から生じるのだろうか。大きな要因のひとつに、子どもたちの遊びの変化があげられるだろう。最近子どもたちに流行している「ベイブレード」なるコマ回しについて、具体的に考えてみたい。

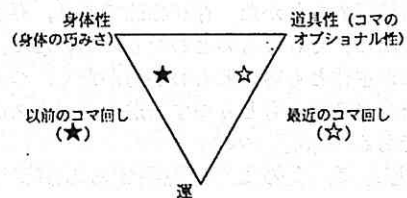
このベイブレード（図2）というのは、一本の軸を指に引っかけ引っっこ抜くだけで、幼い子どもでもとても容易にすごい勢いで回転させることができるコマであり、それを仲間同士でもって専用のスタジアムで戦わせて勝負するわけである。著者自身は、ベーゴマの世代ではないが、やはりコマ回しに相当の情熱をかけ、仲間と競い合った記憶がある。しかし、その勝負に熱狂する最近の子どもたちを見ていると、著者



[図2 ベイブレード]

であるわれわれ世代がしてきたコマ回しとどこか違うわけである。それが何だろうと考えてみると、われわれ世代が以前おこなっていたコマ回しの勝負では、若干の運と自分自身のコマ回しの腕が競われていたはずである。つまり、ここでは自分の身体の巧みさが命だったのであり、年長者のしなやかな腕の振りを誰もが羨望の眼差しで観察していたのである。ところが先のベイブレードは、そのコマ自体にとりつけるオプション部品によって勝負が競われる。よって子どもたちの興味を中心は、相手のコマが次はどんなオプションをつけているかにつまらることになるわけである。つまり、そこでは、運もあるが、コマ自体とそれにつけ加えた部品によって勝利するわけである。

図3では、コマ回しの勝敗がどんな要素によって成立するかを三角形の図で示したつもりである。以前と最近では、勝負の質が、つまり遊び自体の質が異なってきたことは容易に察しがつくように思われる。つまり子ども自身にとって、自身の身体を駆使した勝利と、道具を駆使した勝利はまったく異なるはずである。もちろん、われわれ世代であっても、コマを変形させることはあつた。しかしその変形は、ナイフやヤスリで入念にされたものであり、微妙な変形ひとつにも身体的背景をもっていたのである。相手とぶつかり合う自分のコマを、自分の身体を駆使したその結果・象徴として見ていた以前の子どもと、とりつけたオプションがうまく相手に打撃をあたえられるかを見ている最近の子どもでは、同じコマを見つめる子どもでもやはり大きな違いがあると言わざるをえないだろう。このように、もっと身体を駆使して遊べばよいと思われる時期にすでに、先の桜井がいうような意味での、身体を実感できないような遊びが絶大な人気を得ている、そのことが気にな



[図3 以前と最近のコマ回し]

るのである。

4-2. 子どもにとって遊びとは何か

上で論じたように「われわれ世代もしくはその上の世代の遊びは、今の子どもたちのそれよりも、ずっと身体感覚をともなっていた」と仮定するとして、では、われわれやその上の世代はそこでどんな身体能力を得てきたのだろうか。また、先の学生らのレポートにおいて、彼女たちが主張しようとしたところの運動遊びから獲得される大事な身体能力とは何だったのだろうか。遊びの本質論を考察することによって、それが探れないだろうか。

西村清和は、『遊びの現象学』において、それまでの大半の遊戯論とは異なった考察の視点を提出する。タイトルの現象学という言葉からも察せられるように、その視点とは「当の遊び手にとって、遊びとは何か」というものである。つまり、ホイジンガやカイヨワたちが著した古典的遊戯論の手法、すなわち客観的な観察視点から遊びの形式を記述し分類するというのではなく、遊ぶ主体の側に着眼した遊戯論を展開したのである。彼は次のようにいっている。

われわれは「鬼ごっこをする」とはいう。それは、鬼ごっこというひとつの行動を指示している。そのかぎりでは、これは、「仕事をする」と同じ表現である。だが、けっして「鬼ごっこを遊ぶ」とはいわない。かならずわれわれは、「鬼ごっこを・して・遊ぶ」とか、「鬼ごっこ・で・遊ぶ」とかいうのである。それはつまり、わたしは、「鬼ごっこをする」というひとつの行動において、そのような状況「に・遊ぶ」ということである。遊ぶとは、ある特定の行動ではなく、その行動をとりつつあるわたしの独特のありかた、存在様態を指示する自動詞であり、とりわけて状態動詞なのである。…(中略)…

遊びとは、ある特定の活動であるよりも、ひとつの関係であり、この関係に立つものの、ある独特のありかた、存在様態であり、存在状況である。それはものとなわしとのあいだで、いずれが主体とも客体ともわかちがたく、つかずはなれずゆきつもどりつする遊動のバトスの関係である¹⁰(傍点ママ)。

たとえば、次のように説明するのが簡単かもしれない。雲梯をする何人かの子どもたちを想像してみる。客観的にいえば、それら子どもた

ち全員は「雲梯で遊んでいる」とみさなれることになる。しかし、子どもという主体に視点をうつすならば、そのなかの年長者k君にとって、この雲梯はあまりに容易すぎて何の面白みもない。彼は年少者に対する師範をかけて出ているのである。この場合、彼にとって雲梯はもはや「遊び」ではない。事実として「雲梯をしている」としても、本当の意味において「雲梯・で・遊んでいる」とはいえない。つまり、当人のなかに、それで「遊ぶ」というあの独得の状態性をもちえないからである。同様にして、多くの成人にとっても雲梯は遊びとはならない。しかし、長年公園から足が遠のき、久しぶりに「できるものかどうか」「どきどきしながら」「試してみる」、まさに主体がそんな「状況に」遊ぶことによって、それはまさしく遊びに成りうるわけである。

西村は、このような遊ぶ主体の状況性について、「宙ぶり状態」と「同調性」をその基本的骨組みとしている¹¹。それはたとえていうならば、「できるか—できないか(雲梯)」「タッチされそう—されなかった(鬼ごっこ)」「怖い—楽しい(ジェットコースター)」「いる—いない(いない・いない・ばあ)」などといった主体本人の宙ぶり感であり、そこでなされている他者や物との同調感といった主客未分のパラドキシカルな状態性だといえるだろう。

ここで、先の学生レポートについて考えてみたい。たとえば「危険なことをどんだんさせたい」というレポート2の学生は、危険なことをする子どもの姿のなかに何を求めたのか。問いの仕方をかえてみる。危険そうな姿、たとえば、雲梯のうえで逆立ちをしようとする子どもはそこで何をしているのか。「危険なことは楽しい」といった学生は、そこに西村が主張するような意味での宙ぶり状態を看取したのではないだろうか。つまり、「うまくしないと落ちる—できればすごい」「怖い—スリルがある」「こう握ると不安定だ—こうだと安定する」というような宙ぶり状態である。マット上の逆立ちがまったく容易になっている子どもにとっては、その逆立ちはもはや本当の意味での「遊び」ではない。それが「遊び」となるためには、その子どもに合ったさまざまな条件(たとえば危険性)

が必要となるわけである。大人側は当然、危険な行為であるかそうでないかのレッテルでもってその行為を見つめるが、子どもにとって「遊び」になり得ているかどうかは、危険で「ある・ない」は関係ないのである。学生は、子どもの遊びのなかにそのような宙づり状態や同調性を求めたのではないだろうか。

レポート1や3の学生が主張しようとしたことも同様であろう。「危険察知能力」「危険回避能力」「様々な状況に対する体の処し方」「十分に身体を使うことによって得られるところの身体能力」などにしても、やはり、上で論じたような遊びの本質を直観的にふまえ提出されてきた見解のように感じられる。ここで著者自身がそれらの共通項を抽出するとしたならば、さらに、それを単なる「遊び」ではなく「運動遊び」ということを念頭し抽出するとしたならば、それらの見解には、「自らの身体感覚でもって試行錯誤する」といった運動遊び特有の土壌があるように思われるのである。つまり、学生たちは、先に述べたような身体を実感できない社会において、運動遊びによって身体感覚的な「宙づり状態」や「同調性」を重視していたのではないかということである。たとえば、木に登ろうとするときの微妙な体重バランス、「ダルマさん転んだ」で近づこうとする際の微妙な足づかい、鬼ごっこにおいて鬼のタッチをかわそうとする身体の動きなど、どんなレベルの運動遊びであれ身体感覚的な意味において「うまくできる—できない」という宙づり状態を味わうことになる。そこで自らの身体感覚をたよりに試行錯誤することによって、自分なりにより適切な動きを発見してゆく。学生たちは、運動遊びにそのような内容を求めていたように感じるのである。

最近であるが、古武術の動きをスポーツ等へ応用し注目される武術家甲野善紀は、動きの質的転換をもとめるために身体感覚でもって探求することの重要性を説いている¹²。彼はそのテレビ講座において、次のようなことを語っている¹³。現在のスポーツ（ウェイト）トレーニングの主流は、ある負荷をかけ筋肉を鍛えようとするが、古武術における稽古は、それとはまったく逆に、負荷ができるだけかからないように

動きそれ自体を工夫するのだという。当然であるが、以前の社会では、わざわざ重い物を持ちあげて筋力をつけようなどとはしなかった。仕事でそうした物を持ちあげねばならない場合には、筋力よりむしろ必要にされたのは、それらをできるだけ軽く感じるような持ち方だったのであり、できるだけ要領よく持ち運ぶ術だったのである。つまり、そのような術を自らの身体感覚をとおして体得することの方がより重要だったのである。そして、甲野はそのような「術」は、いわゆる「マニュアル」の反復練習では身につかないことを主張する。

現在では、できないことは、反復練習して身につけることが、教育界ではすすめられているようですが、このような方法では練習は単にノルマと化してしまい、感じることを、考えることをしなくなる。それでは質的な転換は生まれません。私は稽古とはつねに毎日がライブであると思っています。結果としては反復しているように見えるかもしれませんが、毎回新たな探求をしているのです。稽古するときの精神のあり方は、たえず探求してやっているのと、マニュアルに従って考えずただ反復しているのでは、天地の開きがあるものです¹⁴。

古武術における技や術の体得は、まさに真剣勝負でなされているものと思われるが、しかしそれに劣らず、子どもにとっての運動遊びもまさに真剣そのもののだといえる。逆にいうならば、先に論じた意味において、真剣でなければ、それはその子どもにとって「遊び」ではないのである。そのように、その子どもが彼なりに身体感覚的な宙づり感を味わいながら、そこで自身の身体をいかに使うべきかを真剣に試行錯誤することで、自らに固有な身体能力が育つのである。それはその身体が客観的な数値として「筋力がある・ない」ということとは別に、そうした状況のなかでこそ、より適した動きが創造されることを意味しているのである。

5. [からだ]の賢さ

ここで、著者自身が所属する体育学の領域で、最近殊に注目される滝沢文雄の論を紹介しておきたい。滝沢はまず、最近の体育の授業において動こうとしない学生が目立つことを問題視する。この現象をどう捉えるかであるが、たとえ

ば心理学者なら、これを「動きたくないから動かない」、つまり動きたくないような動機づけがないから動かないのだと、それを心の問題として処理することになるだろう。しかし、滝沢は、「彼らは単に動こうとしないのではなく、動けない」¹⁵のだと主張する。つまり心の問題とは別に、そうした学生の動けない身体それ自体を問題として捉えるわけである。

そして、滝沢はそこから、WISE BODY賢い[からだ]¹⁶という新しい概念を提示し、それを体育の目標のひとつとして掲げようとする。「からだ」に「賢い」という形容詞がつくというのは、何だか奇妙に感じられるかもしれない。しかしたとえば、次のようなことを考えてみるとよいだろう。われわれは「地球上のすべての物体は放物線を描きながら落下する」ということを数学か物理の時間に学び、それを理知的に理解している。しかし、だからといって、実際のキャッチボールという実践において、あらゆるボールをうまく捕球できるかというところまでそうではない。確かに客観的な視点からいえば、ボールの落下する地点は、その大きさや重さ、形状、またそれが投げ出される初速度などから理知的に予測可能となる。しかしそれを自らの身体で捕球するということになれば、重要となるのは、客観的な視点よりもむしろ運動実践者自身の視点である。そこでは、投げてくる相手がどれ程の投球能力を有しているのか、どれ程の大きさや形状のボールが、いか程のスピードで自分にせまってくるのか、そのときにはそれが自分にどのように見えるのか、そして、捕球のためにはそれに対していかなる準備動作をするべきかなどが、即座に判断され実践されることになる。つまり、キャッチボールに必要なのは、理知的な知とは異なった、そうした実践を可能にする知ともいえるだろう。

滝沢によれば、実践的な知とは、みずからが動くために、外界(物や人)と具体的にやりとりすることによって獲得される知である。そして、それは「実践するために必要な様々な情報を、みずからの[からだ]に結びつけている知であり、みずからの[からだ]と相関的な知なのである」¹⁷。その知が豊かであることが、いわば実践的に賢い¹⁸ということになるだろう。

さらにいうならば、滝沢がいう賢い[からだ]とは、そのような実践を可能にさせるところの身体なのである。彼はそれを次のように説明する。

[からだ]の賢さとは、いろいろな状況に対応できることであり、それは実践的な問題を具体的なやりとりとして解決できることである。すなわち、問題を解決し、的確に無理なく、しかも多様に動けることである¹⁹。

そして、滝沢は、こうした[からだ]の賢さを担うのが【動作】であると主張する。「実践のために思考するには、言葉ではなく、その【動作】で考える必要がある」²⁰。滝沢が使用する【動作】という言葉は、目に見えるところの動作ではなく、動きつつある主体が感じるところの身体感覚的な知覚内容そのものを意味している²¹。それはまさに先に論じた「身体感覚でもって試行錯誤する」ことと同様といえるだろう。

滝沢がいう[からだ]の賢さとは、いうまでもなく、単に「逆上がりができる」ということではないし、「バスケットボールのシュートが上手だ」ということでもない。また、最初に論じた体力という言葉からいえば、「反復横とびの点数が高い」とか、「50m走がはやく走れる」ということでもない。そういった個々の運動領域を超越したところの、さまざまな実践的状况に対応できる身体であり、それら実践によってさらに賢くなり得る身体だといえるだろう。そのような実践的な問題によりよく適応fitnessすること、その核となる知を備えた身体こそが、子どもにとって必要な身体なのではないか。それが、本当に求められるべきphysical fitness身体能力ではないかと考えるのである。

6. まとめ

滝沢にたよって、まとめをするならば、子どもたちに必要とされるのは[からだ]の賢さだといえるだろう。さまざまな運動遊びや身体運動によって育てられるべきは、そのようなphysical fitness身体能力である。今後、多くの子どもたちがそのようなphysical fitness身体能力を獲得し、その結果として、体力テスト

の数値が上昇するのであればまったく問題はないだろう。しかし、著者自身の憶測であるが、ごく近い将来の現実には、体力テストの数値は上昇するものの、「ころんで顔に怪我する子どもが多い」「友達どうし喧嘩の仕方を知らない」「雑巾をしっかりと絞れない」といった子どもに関する日常会話は減らない気がしてならない。それは、単に屋外で走りまわる経験や友達どうし喧嘩をする経験、雑巾を絞る経験が減ったからというだけの問題なのではない。それだけでなく、やはり子どもたちが自身の身体について無知であり、さまざまな状況に対処しうる核となる身体的能力を持ちあわせていないということが問題とされるべきなのである。そこにおいては、「反復横とびがたくさんできる」「50m走がはやく走れる」などといった事実は、当の子どもにとって何の意味もなさないことになる。

こうした問題は、どこか学力論争とも共通しているといえる。テストの点数の高い者が学力が高いとは一概にいえない。でも一般的に、その学力テストによって学力は測定され、そして、それによって子どもたちはさまざまなレベルに格づけされている。著者は、学力テストが要求する幅広い「知識」を一概に否定するつもりはない。しかし、実際に当人がこれから「生きてゆく」ということを前提にしたとき、彼にとってそれらが本当の意味での「知」になり得ているかどうかという問題は、重要な視点として捉えるべきだと考える。確かに、そうした「知」や「能力（身体的能力）」といった本質的な事柄は、客観的な数値として測定することはできない。そこに困難が生じることは必至であるが、しかし実際の教育現場で、そのような視点をもつともたないのでは大きな差が生じることも必至だろう。つまり、教育に携わる者自身が、「逆上がりができる」「バスケットのシュートがうまい」または「反復横とびがたくさんできる」「50m走がはやい」などという個々の達成度に固執するのでなく、ここまで論じてきたような身体を射程にしつつ、運動遊びや身体運動に内包されるその過程を重視することが求められるのである。

【付記】本稿は、2003年9月におこなわれた本学公開講座（パネルディスカッション／子どもの「からだ」と運動：子どもにとって必要な「からだ」とは）の発表原稿をもとに、内容を修正加筆したものである。

- 1 たとえば、以下の文献を参照されたい。今村嘉雄ほか編（1976）新修体育大辞典，不味堂：東京．p.947．日本体育協会監修（1976）スポーツ用語事典，ぎょうせい：東京，p.777．日本体育協会監修（1970）現代スポーツ百科事典，大修館書店：東京，pp.662-663．
また、体力に関する同様な記述が認められるものの、まったく独自の視点から体力（またはそれに関わる項目）を説明するのが、以下の2文献である。前者は体力を「physical abilities」としており、physical fitnessは「健康」と結びつく概念だと捉える。後者は、体力測定に対して批判的に検討を加えており非常に興味深い。なかでも特筆に価するのは、歴史的な視点から、いわゆる〈一人前〉だと判断されるための体力とはどのような基準だったかを調査しており、たとえば新潟県の場合では「5斗の年貢米を負って一里半、師走の雪道峠を上下して運ぶ」ことがその証しであったと解説している。エリッヒ・バイヤー編（1993）スポーツ科学辞典：大修館書店：東京，pp.362-364．岸野雄三ほか編（1986）最新スポーツ大事典，大修館書店：東京，pp.742-747
- 2 以下より引用した。前掲，スポーツ用語事典，p.777．
- 3 この場合、physical fitnessは「身体適性」と訳される。たとえば、以下の文献を参照されたい。シーデントップ，D.：高橋健夫訳（1990）楽しい体育の創造，大修館書店：東京，pp.92-117．
- 4 「教科としての体育（身体教育）」の歴史を検討することは、本稿の課題ではないが、簡単にそれを辿るならば、それは大きく3つの段階から理解されるのが一般的である。すなわち「身体の教育」「身体による教育」「運動の教育」という歴史的な流れである。各時代において、その目標は「身体そのもの」から「身体（もしくは身体的経験）を通した人間の社会化」、そして「運動そのもの」というようにその重点をうつしているが、これら目標は微妙なバランスを保ちながら現在まで引き継がれている。
- 5 たとえば、現在文部科学省が実施する「新体力テスト（12才—19才対象）」は、以下のよう

- なテスト項目で、それぞれ括弧内の指標を得ている。握力（筋力）、上体起こし（筋力・筋持久力）、長座体前屈（柔軟性）。反復横とび（敏捷性）、持久走もしくは20mシャトルラン（全身持久力）、50m走（スピード・走能力）、立ち幅とび（瞬発力）、ハンドボール投げ（瞬発力・投能力・巧み性）。以下を参照されたい。文部科学省スポーツ・青少年局（2002）平成12年度体力・運動能力調査報告書。
- 6 以下のウェブページを参照されたい。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/021001.htm
 - 7 桜井哲夫（1985）ことばを失った若者たち、講談社：東京、p.15.
 - 8 斎藤孝（1999）子どもたちはなぜキレるのか、ちくま書房：東京、pp.28-29.
 - 9 著者は、これに関連した論文を発表しているので参照されたい。石垣健二（2003）新しい「体育における人間形成」試論—道徳的問題の背後としての「身体性」の検討一、体育原理研究, 33, pp.41-52.
 - 10 西村清和（1988）遊びの現象学、勁草書房：東京、p.31.
 - 11 同上書、p.38.
 - 12 以下の文献を参照されたい。「動きの質」や「感覚（体感という言葉も使用される）」についての記述は、特に第1, 2, 8回を参照されたい。甲野善紀（2003）NHK人間講座：「古の武術に」学ぶ、NHK出版：東京.
 - 13 同上テキストのテレビ放映版で語られたところによる。第2回「古武術との出会い」（平成14年10月15日放送／10月22日・11月8日再放送）
 - 14 甲野、前掲書、p.16.
 - 15 滝沢文雄（1999）実践的能力としての「からだ」の賢さ—身体についての現象学的考察一、体育学研究, 43-2, p.80.
 - 16 このことについては、以下も参照されたい。Takizawa, Fumio（1996）Wise body as a new conception. Proceedings of the 2nd Tsukuba International Workshop on Sport Education, Tsukuba University: Tsukuba, pp.105-111.
 - 17 滝沢（1999）、前掲書、p.85.
 - 18 強調しておきたいが、この「からだ」の賢さとは、単にさまざまな「物」に対してうまく対処できるということだけではない。滝沢は次のように主張している。「実践的な賢さには、物の論理が分かる、相手（動き、意図、気持ち、感情）が分かる、関わりが分かる、実践的な状況が分かる、雰囲気分かる等の事柄が含まれている」。同上書、p.85.
 - 19 同上書、p.87.
 - 20 同上書、p.86
 - 21 同上書、p.86